essay

「農業は感動産業です！」その１

蘭越町　農業

及川　かをり

◆会社を辞めました

磯谷郡蘭越町ってご存知ですか？

札幌から中山峠を越えて自動車で安全運転二時間、七つの温泉と稲作の町です。

蘭越町で農家をしています。その前は平凡なサラリーマンと専業主婦という経歴の夫婦が、三人の子供を引きつれて稲作の蘭越町で畑作をしています。

結婚して一〇年目のある日、「蘭越町で野菜を作る！」と夫が宣言しました。

「蘭越ってどこ？農家になるってどうすればいいの？」

「住めばわかる。やらなきゃ始まらないさ」と、夫は会社を辞めました。倒産したわけでも、くびになったという理由でもなく、農家になるために。

夫はコンサルタントをしていました。町おこしとか村おこしとか、ふるさと創生という言葉が盛んに飛び交っていた頃です。仕事で蘭越町を訪れ、農村青年会の方々と話をする機会がありました。農村青年といっても二〇代から五〇代と幅広く、その農村感覚の寛大さに三〇半ばの夫は感銘を受け、青年たちの活力とたくましさに、すっかり洗脳されてしまったそうです。

みのり会の会長椿新二さんを頼って、とにかく蘭越町富岡で暮らそう。夫は会社を辞めました。一家はそろって富岡に引越し、住めばわかると

及川　かをり（おいかわ　かをり）さん

札幌市生まれ
1998年より蘭越町富岡在住
夫　　肇41歳
長女　知香　中1
長男　洸一朗　小6
次女　智世　小1
2.2haの農地で約30種類の野菜栽培

言った夫の言葉通り、私もあっというまに農村の信者となりました。あとは農家になるための行動を起こすのみ。元コンサルタントの夫が計画したように、とんとん拍子というわけにはいきませんでしたが、なんとか職業欄に農業と記載出来るようになって現在三年目、四一歳思考錯誤の新米農家です。

◆何屋になる？

おどろくべきは、野菜を作ると言った夫がその実は野菜嫌いであるということです。

トマトが大嫌いなトマト農家、元コンサルタント夫の言い分…「トマトが嫌いなオレでもうまいと思うようなトマトを作る！究極だべ！」とのことだそうです。

春・夏・秋・冬、農家の一年とはどのようなものなのか…トマト栽培どころか、生活のすべてがほぼ白紙状態からのスタートでした。はたしてサラリーマン生活からオサラバして、農村でゆったり・のんびり暮らす夢は現実となるのでしょうか？

蘭越町は稲作が中心ですが、稲の育苗あとのハウスでトマトやメロンなども盛んに栽培され、休耕の田圃では大豆・小豆・そば・アスパラガスなども手広く生産されています。

〝どんなことやりたいの？〟

ほとんどが中規模以上の農業の町で、何屋になる？という質問に遭遇しました。ジャ

種まきを手伝う子ども達

ガイモ農家とかアスパラ農家とか米農家と呼ばれる専門分野の選択です。〝……〟自分達が目指す農業を問われた時、〝おいしいトマトをつくりたいのです〟という答えでは、あまりに稚拙でありました。

農業で自立という目標で営農方法を模索して、引き受け農家となって下さった椿氏から提案された研修課題は、「野菜栽培に使えそうな資材や基本的な栽培技術の提供、町内で野菜栽培を手がけている人の紹介などはしてあげるから、あとは自分達で栽培し、販売してみなさい」というものでした。

野菜の栽培に関しては、農業改良普及所に足しげく通い斯波普及員の指導を受け、ことあるごとにアドバイスを求めました。みのり会のメンバー、ご家族のみなさんも、心細いわたしたちを手伝いに来てくださったり、励ましてくださったり、なんとか収穫した野菜は、わたしたちの就農を応援してくれている札幌近郊の知り合いが買ってくれました。

栽培品目ははじめての年ということもあり、何が適しているのか、こんなものにも挑戦してみたいという具合で、畑はまるで八百屋の店先の様相です。トラックでの個人販売ではこれが受けました。現在もトラックでの個人販売と少量の農協系統出荷による経営をおこなっていますが、このような個人販売を主軸とし

みのり会の会長
椿新二氏と政子夫人

農園

た小規模な経営は、国民の食料自給を担うという意味では本来農業といえるものではないという指摘もあろうかと思います。案の定、八百屋だべとも言われます。

しかし、自分達の資産や資金力・農業技術・経験などを補って営農していくには、このようなスタイルからはじめていくという方法がベターではないかと考えたのです。

生産者が、直接野菜を買って下さる方との情報交換ができるという点でも、消費者が求めるもの・売れるものをつくるヒントとなるのです。直接、おいしかったという言葉が聞けるのも、なにより大きな励みになります。

何屋？野菜売りトラックの運転手は百姓プラス八百屋で九百姓屋？

◆農家の心がけ

わたしたちは、消費者から生産者となりました。が、生産者は消費者でもあります。

わたしの買い物について考えてみました。毎日の食卓を預かる主婦の重要な仕事は買出しです。価格と品質を見極めるプロといったところでしょうか。

第一条件はおいしくて安いこと。ダブルなところがわがままな消費者らしい。平成五年の米不足の時、おいしくない米を米として受け入れることができませんでした。どんなに安くても米としては受け

トマトの圃場

農園の応援団

ハジメさんのトマト

入れられませんでした。それまでは、たいていのものはおいしいと思っていましたから、おいしい・まずいという感覚がショックでした。おいしいという基準は嗜好の違いであり、個人差があります。この頃から、食べ物においしい・まずいという違いが生じはじめ、おいしいものは高値の傾向があるという法則も発見しました。

近頃第二条件に、安全という意識が買い物に不可欠となりました。安全でないものがあるらしいという情報を目にしたり耳にしたり、素人判断ではありますが、あんなに世間が騒いでいては、鈍感ではいられません。具体的にわたしの判断基準をご披露しますと、〝安全です〟という商品表示とか〝遺伝子の組み換えはしていません〟とかが明記してあれば、なにやら良い事をしたような気分で買います。

でも、安すぎる一パック一〇個入りのタマゴが八八円！と遭遇した時、何かあるかもと生産コストだの流通コストだの多少思案はするものの、スーパーががんばったのかなぁ、近頃タマゴで何かあったっていう話も聞いてないし、だいいちみんなが買って食べているというなによりの安心感で買ってしまいます。輸入の野菜も以下同文、罪悪感はすっかり忘れてしまいます。農家のかあさんが、こんなにあさはかだとは、と怒りを感じたとしたら、あなたは日本

の農に対してすばらしく高い意識をもった国民です。

私も反省はしているのです。少なくとも、国の食料自給率向上のため、農産物の安全性の確保のため、日本の農業を守るため、貢献すべき正しい消費者にならなくてはと。

やはり、普段の買い物でも日本の農業を守るという高い意識を心がけましょう。

そして、安心・安全・おいしくて・良心的価格の農産物の提供を心がけましょう。

農家はゆるくないべ！と励まして下さる大先輩
モーじいちゃんとモーばあちゃん

◆少しずつ目標が見えてきました

サラリーマン時代、農村景観・環境保全・農業経済・農村と都市の交流などコンサルタントとして携わってきた夫は、農家となって農村に暮らし、その計画を実行しようと考えているらしいのです。計画が現実とかけ離れたもので、うまくいかなくなって途中でリタイヤするような事態が起これば、これまで協力を惜しまず応援してくれた人達にも大きな迷惑をかけることとなってしまうと真剣に取り組んでいます。農家の現実は営んで肌身で感じ始めています。

農業は肉体的にも精神的にも厳しい現状です。既存の農業形態を否定するという考えではないのですが、わたしたちの農産物は初心者にもかかわらず無農薬・減化学肥料で栽培しています。無農薬での野菜栽培に取り組むためには、高度な技術と経験が必要であるということも学習しました。価格は野菜を買って下さるお客さんから、ほんとうに無農薬なの？といわれるくらい普通の値段で提供しています。経営的には自立には至っていませんが、まだまだやるべき事、やれる課題がたくさんあることもわかってきたところです。

強がりでなく、汗を流した分だけ結果が得られ、自分達の力量が分かりやすく査定される農業という職業に魅了され、農村での生活に生命の実感をおぼえる日々、わたしたちは充実した日々に感動をもらっています。